2017.7.30 年間第１７主日

「天の国」のたとえ

マタイ福音書 13 章 44-46

（そのとき、イエスは人々に言われた。）「天の国は次のようにたとえられる。畑に宝が隠されている。見つけた人は、そのまま隠しておき、喜びながら帰り、持ち物をすっかり売り払って、その畑を買う。また、天の国は次のようにたとえられる。商人が良い真珠を探している。高価な真珠を一つ見つけると、出かけて行って持ち物をすっかり売り払い、それを買う。」

説教

若いころよく自転車に乗って遊んでいました。休みの日にいつものように自転車遊びをしての帰り道で遊び仲間とこんな話をしました。「あそびは役に立たないほどおもしろい」そうだ、そうだと仲間一同が盛り上がったことを思いだしました。

将棋の藤井四段は幼いころにお気に入りのおもちゃがありました。このはなしがテレビニュースになると、デパートにお母さんたちが殺到してその外国製のおもちゃはあっという間に売り切れになったそうです。

さて、きょうの福音は神の国（天国）のたとえです。

１.ある小作人が畑で宝を（ぐうぜん）見つけ（持ち物を全部売り払って）手に入れた。

２.上物を探していた商人が（それをようやく ）見つけ（持ち物を全部売り払って）手に入れた。

このたとえ話のどこが天国なのか、なにが神の国なのかよくわりません。

そこでさっきの「あそび」の話です。あそびは役に立たないほどおもしろい。福音もこのあそびも定義に似ているとおもっています。福音はわからなければわからないほど価値がある。福音はわからないほどありがたい。

伝統的解釈では、わたしたちは日々の暮らしの中で神の国をたえず求め、神を中心とした生き方をしなければいけませんよ、人間的な生き方に満足して

いてはいけません、という教訓なのだと説明します。どうして良い真珠を見つけるはなしがこう解釈できるのでしょう、強引すぎるような気がします。だから、へんに解釈するよりわからないままにしておいたほうがいいかなあと思うわけです。
さっきの藤井四段のおもちゃのはなしもそうなのですが、へんに解釈すると同じおもちゃを我が子に与えれば、天才少年藤井四段にあやかれる、となるのでしょう。伝統的な解釈が間違っているといっているのではありません。こう補足してみます。
わたしたちは日々の暮らしの中で「なんの役にも立たない、かえってじゃまになるかもしれない」神の国をたえず求め、神を中心とした生き方をしなければいけません、「ぐうぜん穴をほったら見つかるかもしれないお宝を求めたり、かといって血眼になって真理を追い求めるというような」「そしてそれが見つかったからと言って全財産を投げ出すような」そんな人間的な生き方に満足していてはいけませんよ。
先週さぼってしまったマタイ 13 章の「毒麦のたとえ」と似たようなまとめが、きょうの福音の直後（マタイ１３：４７－５２）に続いています。ざっくりまとめていっていまえばこうなります。終わりの日には天使たちがやってきて良いものと悪いものをよりわけて悪いものは焼かれる。宝を見つけて手に入れても、良い真珠を探し求めて手に入れても、たとえそれを得るために全財産をなげうっても終わりの日に焼かれてしまうかもしれないと福音は告げています。

ある時イエスはニコデモとこのような会話をしました。

> **ある夜、イエスのもとに来て言った。「ラビ、わたしどもは、あなたが神のもとから来られた教師であることを知っています。神が共におられるのでなければ、あなたのなさるようなしるしを、だれも行うことはできないからです。」イエスは答えて言われた。「はっきり言っておく。人は、新たに生まれなければ、神の国を見る**

ことはできない。」ニコデモは言った。「年をとった者が、どうして生まれることができましょう。もう一度母親の胎内に入って生まれることができるでしょうか。」ヨハネ 3:2-4

イエスの答えにとまどうニコデモの気持ちはこういうことかもしれません。

「遊びをせんとや生まれけむ　戯（たわぬ）れせんとや生まれけん　遊ぶ子供の声きけば　我が身さえこそ動（ゆる）がるれ」（梁塵秘抄）

これは日本の古い歌です。いろいろな解釈があるうたですが、わたしは神の国（天国）とは「遊び」「こども」がキーワードになっているとおもいます。邪気のないこどものように、無邪気なこどもになって遊ぶ、天の国をこんな角度からイメージしてみたらどうでしょう。